「戦争と平和！」
第４回

深夜の八王子大空襲体験

影山 洋

空襲警報が鳴ったら、その日は父親が掘った防空壕へもぐらずに、家の近くの高台の桑畑に逃げ込んだ。既に多数の人々が避難していて、ざわざわとしていた。皆、駅や町中の方を見下ろしながら潜んでいた。今思えば、前日に米軍機がばらまいた空爆予告ビラを見たか、人伝に聞いたのだろう。昭和 20 年 8 月 2 日の夜中の事だった。当時私は 7 歳。両親と兄と家族４人で八王子の東の外れ八王子駅から 3～4 kmの東側に住んでいた。逃げ込んで暫く桑畑にしゃがみこんでいると、背後からゴゥオーと物凄い爆音が聞こえてきた。そして辺りが真昼のように急に明るくなった。照明弾だ。弾の上部に傘がついていて、ゆっくり周辺を照らしながら落ちて来る。更に爆音が最高に高鳴ったと思ったその時だ。銀色に光り輝いた 10 数機の B29 の編隊が、左後方の頭上に現れたと思った瞬間、格納庫が開き、数えきれないほどの焼夷弾が、ヒュルヒュルと空気を切りながらバラバラ落下して来た。頭の上に落ちて来るのではないかと非常に怖かった。死ぬのかと思った。何で桑畑を狙うのだ！上空から桑畑に狙うのだ！上空から桑畑に逃げ込んだのが見えたのかとも思った。高いところから頭上に落とされた焼夷弾は真下には落ちずに、2、3 キロ先の駅周辺に落ちていった。B29 の編隊は時間を空けて飛来し、その後も続いて爆撃を止めなかった。夜の火災は本当に間近に見える。目の前は火の海で真っ赤か。人々の悲鳴や消防団の叫び声が飛び交い、さらに爆撃音やパチパチと家々の燃える音が高まった。少し落ち着いて見ると、B29 の落とす焼夷弾が頭上から前方へ移動していた。八王子駅から中心街を爆撃し始めたようだ。「ああ！これで助かった」と心から思った。幸いにして我が家周辺の空襲は免れた。

米軍機投下の空襲の予告ビラ

八王子空爆後被害写真

その夜から 2 週間後、どこかの家の庭先の机の前に並ばせられた。大人は皆、肩を落としていた。辺りは静かで言葉を交わす人もいない。そのうち雑音の入り混った声がラジオから流れてきた。すると、すすりなく声があちこちから聞こえた。何を喋っているのか分からないけど「忍び難きを忍び」の声の後からは、泣き崩れる大人や、抱き合いながら泣く人、茫然と足下を見ている人の光景を目の当たりにして、子供ながらに「これで戦争は終ったんだ！」「もう怖い空襲は来ないんだ！」「良かった！」と思った。

それからが大変だった。食糧難だ。お米は買いたくとも買えない。統制されて配給が無ければ食べられない。仕方なく芋や豆が主食だ。だから常にお腹を空かしていて皆ガリガリに痩せて栄養不足。食べられるものは何でも食べた。ハコベやつくしんぼう、さつま芋のつる。イナゴ、これは最高の蛋白源。竹の筒に袋を巻き付けて素手で捕まえ、家に帰って羽と足をちぎって醤油で炒めて食べた。当時のご馳走だった。主食の配給は暫くなく、皆、箪笥の着物を背負って農家を訪ね物々交換して飢えを耐えていた。

当時八高線（八王子～高崎）は買い出し列車と言われていつも超満員だったそうだ。昭和 22 年 2 月 25 日、その列車が「脱線転覆事故」を起こした。定員の 3 倍以上の乗客（殆ど買い出し人）を乗せ、高麗川駅の手前の鹿山峠のカーブを、スピードも落とさず曲がり切れずに脱線。3 両が 5 メートル下の桑畑に転落した。死者 184 名、重軽症者 570 名が出たそうだ。今も事故現場にその慰霊塔は建っている。